

# 資料館だより

企画・編集 国立ハンセン病資料館

発行 公益財団法人  
日本財団

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13

電話 042-396-2909

FAX 042-396-2981

URL <http://www.hansen-dis.jp>

## 『資料館だより』 100号の刊行に寄せて

国立ハンセン病資料館

館長 成田 稔

一九九三年の開館以来、年4回発行してまいりました『資料館だより』が、一〇〇号を数えるまでになりました。これまで『資料館だより』をお読み下さった皆様に深く感謝いたします。この機関紙が、館の活動とハンセン病問題について広くご理解いただく入口になると共に、ハンセン病を病んだ人びとの名誉の回復に向けて、さまざまな議論の場となるよう願っています。

この機会に、これから当館に必要なことを述べてみたいと思います。一九九三年の開館より3年後、一九九六年に「らい予防法の廃止に関する法律」が公布され、次いで二〇〇一年には「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」の熊本地裁一審判決において国が敗訴し、控訴を断念する事態が続き、控訴に伴い発せられた「ハンセン病問題の早期かつ全面的解決に向けての内閣総理大臣談話」の中に「名誉回復及び福祉増進のために可能な限りの措置を講ずる」とあります。そのなかに資料館の拡充が盛られ、高松宮記念ハンセン病

資料館は、二〇〇七年に国立ハンセン病資料館としてリニューアルオープンしました。

二〇〇八年に公布された「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」の第四章「名誉の回復及び死没者の追悼」第十八条には、「国は、ハンセン病の患者であった者等の名誉の回復を図るため、国立のハンセン病資料館の設置、歴史的建造物の保存等ハンセン病及びハンセン病対策の歴史に関する正しい知識の普及啓発その他必要な措置を講ずるとともに、死没者に対する追悼の意を表するため、国立ハンセン病療養所等において収蔵している死没者の焼骨に係る改葬費の遺族への支給その他必要な措置を講ずるものとする」とあります。ハンセン病を患った人々への蔑みを改め、それに基づく名誉の回復を、私たちに迫っているのです。

それについて、こうあればよいという在り方のひとつを、ハンセン病であった方々が教えてくれています。

それは全国ハンセン病療養所入

所者協議会の運動史『復権への日月』（光陽出版社、二〇〇一年）の中の77頁に書かれている文章です。「日本らしい学会を日本ハンセン病学会とした」名称変更の問題は、これで一定の目標に達した、ということになるのであろうか。勿論、これからの同じことが繰り返されるに違いないが、目的はあくまでも正しい認識の普及であり、日本語から「らい（癩）」の字句を抹消することではなく、最終的には、やはり「私はいでした」といっても一向に支障のない社会を実現することであればならない。このような社会の創生が名誉回復につながると言っているのです。

「私はハンセン病（らい）でした」と素直に言えない社会をつくっているのは、私たちなのです。「普段のようにお勤めでしたから、気付かずにいました。もうおよろしいのですか？いつまでも一緒に過ごさなければいけないことですか？」とさげなく話し合える——ただそれだけの社会をつくるのは、むづかしいのでしょうか。そのためには、ハンセン病についてそれなりの知識が広まりつつある今も、未だに根強く残っている偏見を正す啓発がまず必要かもしれません。

私は一九五五年に多磨全生園に就職しましたが、最も激しい症状を呈するL型（いわゆるらい腫型）の進行した症例は見たことがありません。化学療法のない時代に病み重った患者の苦悩は計り知れま

せんが、そうした人びとに容赦なく向けられたであろう差別と、すでに重症の患者を見ることのなくなった現在に残る偏見とは、異なるものはずです。もしかしたら今の偏見は、説明のつかない想像によるものかもしれませんが、そうであれば、症状や後遺症としての外貌の変化を恐れる愚かしさを指摘するだけでなく、そのような思いを持つに至った経緯を自問自答してもらうような啓発が必要です。

実は高松宮記念ハンセン病資料館から国立ハンセン病資料館への移行当時すでに、館内の常設展示が前よりも見劣りがするという声をよく耳にしました。確かに、無断外出患者を犯罪人扱いにする書類、大火の際の水不足、不当な懲戒検束、手足の知覚障害を無視した工具など、あるべき医療の姿と療養生活との乖離を表すものとして、一層の工夫があつてよいでしょう。ハンセン病資料館の展示を再考する所以が、ここにもあります。

今後とも、当館への変わらぬご支援をよろしく願っています。

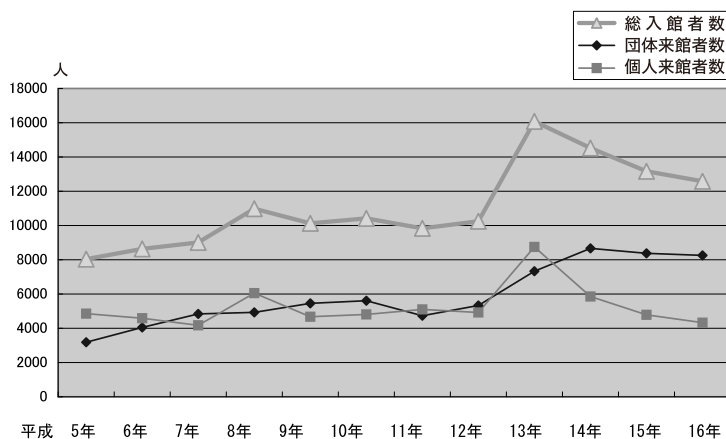


『資料館だより』復刻版—20年のあゆみ—  
1冊で読むことができます。在庫あり。

# 見出しでつづる 『資料館だより』100号のあゆみ

## 開館以来の入館者数分析 平成13年が最多 1日平均46人

(表3) 総入館者数・団体来館者数・個人来館者数の推移



高松宮記念ハンセン病資料館長 大谷 藤郎

「資料館だより」の  
創刊にあたって

●創刊号 1993年10月1日…大谷藤郎初代館長は、「小さいながらハンセン病の歴史と資料館について発表と交流の自由なメディア、『すべての人間の尊厳』以外の何者をも恐れないでモノ申せるメディアであること」と抱負を語っている。

総入館者数年度月別内訳 (表1)

	平成5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	計
4月		1,497	1,220	1,568	1,370	1,116	1,292	1,770	1,461	2,022	1,601	1,316	16,233
5月		800	724	731	1,000	804	566	601	1,003	937	1,115	990	9,271
6月	600	713	585	946	822	911	808	928	1,437	1,151	1,042	1,273	11,216
7月	1,081	762	855	914	925	1,167	1,522	1,114	1,709	1,494	1,057	1,039	13,639
8月	998	484	694	1,174	654	608	420	627	1,832	1,020	708	1,148	10,367
9月	808	641	806	572	745	891	905	822	1,438	1,163	907	809	10,507
10月	1,228	1,102	1,125	1,193	1,111	1,450	880	922	1,791	1,897	1,086	1,576	15,361
11月	1,125	1,181	827	1,464	1,262	1,236	987	979	1,543	1,789	1,340	1,568	15,301
12月	606	394	570	634	728	720	551	670	774	739	1,032	600	8,018
1月	288	212	261	400	264	543	715	717	831	729	724	778	6,462
2月	843	313	427	566	562	489	596	574	975	699	1,126	631	7,801
3月	459	536	919	819	685	481	593	526	1,284	881	1,426	855	9,464
計	8,036	8,635	9,013	10,981	10,128	10,416	9,835	10,250	16,078	14,521	13,164	12,583	133,640

●第50号 2006年1月1日…第50号の紙面では、開館から12年間の入場者数の分析がなされている。国賠訴訟判決のあった2001（平成13）年に大きく伸びている。

「あとがき」には、編集を一手に引き受けていた語り部・運営委員、佐川修さんの思いがこもる。

第17号 1997年10月1日

◎あとがき  
世の中で一番嫌われた病気。国の施策（法律）で偏見差別を助長させてきた。患者やその家族の犠牲ははかり知れない。今は「ハンセン病」を知らない世代が大半だ。しかし、歴史を風化させてはいけない。（修）

## コラム 1

建設現場一階床面



●第51号 2006年4月1日…新館建設を伝える1面記事。新館工事の進捗や関係者による日常の作業、展示案の具体化について白熱した議論が行われていることについて報じられる。

新館建設いよいよ繁忙  
基礎工事、展示も具体化



## 国立ハンセン病資料館再開館

偏見差別解消の中核機関  
歴史を語りつぐ場に

●第55号 2007年4月1日…リニューアルオープンを1面で伝える。写真は右から東村山市長、厚生労働大臣、全療協会会長、社会福祉法人・ふれあい福祉協合理事長の4人によるテープカットの様子。この号から『資料館だより』はカラーとなる。



## 偏見差別の根拠 「らい予防法」廃止へ

●第11号 1996年4月1日…らい予防法廃止を、1面で報じた。「元・現ハンセン病患者の人権は一応回復されることになるが、現実には長年沁みついた偏見や差別が一朝一夕に解消されるとは思われず、今後の対応がさらに必要となるであろう」と記事は伝えている。

●第60号 2008年7月1日…ハンセン病問題基本法成立（入所者の生活保障、社会復帰の支援、名誉回復等を定めた）を1面で伝える。「国立のハンセン病資料館の設置」も条文に定められた。

遅すぎた人権回復

らい予防法の廃止に  
関する法律案の概要

ハンセン病問題の  
節目を報じる

署名は全国で93万筆を超える  
ハンセン病基本法成立！

## 「らい予防法」は違憲

●第32号 2001年7月1日…国賠訴訟熊本地裁判決と控訴断念を1面で報じる。1953年のらい予防法闘争と比較し、マスコミが大きく取り上げ支援者が増えたことから、「国民の意識の変化に感無量である」と記されている。



画期的な熊本判決  
控訴断念補償法案

# 多彩な館の活動

## 資料館四周年記念 記録映画会に五百人

## 見えない壁を越えて

—— 声なき者たちの証言 ——

●第4号 1994年7月1日…開館1周年を記念して、北條民雄『いのちの初夜』を100部復刻。

北條民雄著  
『いのちの初夜』発行  
資料館では開館一周年を記念して、東京創元社のご諒解を得て、希望の多い北條民雄著「いのちの初夜」を百部製本し発売することになりました。定価は四百円です。

●第16号 1997年7月1日…資料館4周年記念の映画『見えない壁を越えて』（監督・中山節夫）上映会には40以上の自治体から500人以上の人が集まった。同映画は、らい予防法が廃止されたことを受けて制作された記録映画。

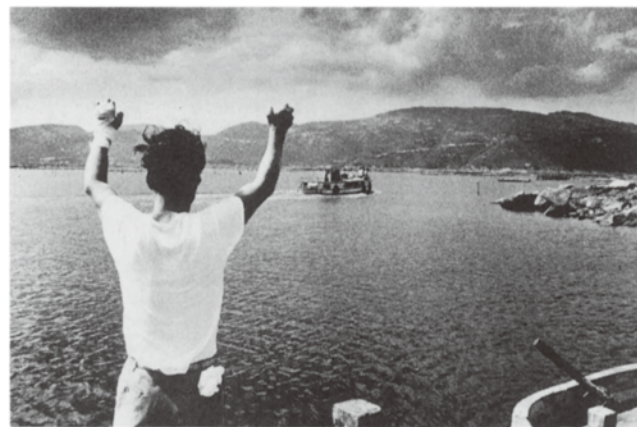
## コラム②

「来館者の声」はアンケートを伝えるコーナー。「作品の見事なこと、これも驚きと感動」という声がある一方で、「こんなにきれいにしていると現実とかけはなれて、その時の人の苦しみがあまり伝わってこないように見られます」といった直言も。

第4号  
1994年7月1日

## 作品に驚きと感動

来館者の声



「わかれ」愛生園の棧橋にて（昭和45年9月）

●第21号 1998年10月1日…全国の入所者を撮りつけた写真家の趙根在（村井金一）が亡くなった翌年、開館5周年記念として作品100点を選び、写真展をおこなった。

## ハンセン病の光と影 趙根在（遺作）写真展

10月15日～11月29日

●第72号 2011年7月1日…春季企画展の附帯事業として、音楽家のタケカワユキヒデが「多磨盲人会ハーモニカバンドの思い出」と題して講演。1975年から2年間、サポートメンバーとして活動した思い出を語るとともに、当時の音源も流された。

春季企画展「かすかな光」をもとめて  
タケカワユキヒデさんの講演に感動



満員の聴衆の前に講演する鶴見先生

●第33号 2001年10月1日…開館8周年記念として、鶴見俊輔講演会「ハンセン病との出会いから」を開催。詩人・大江満雄や文学を志していた入所者との交流が語られた。420人を超す満員の盛況であったことを伝えている。

## 資料館八周年記念講演 鶴見先生の話に感銘



タケカワユキヒデさん講演会



# 連続 学習会

## 「らい予防法」とはなにか？ ——法律と市民社会——

石崎講師

●第31号 2001年4月1日…国賠訴訟が行われる中、ハンセン病資料を生かすネットワーク有志の協力を得て、連続学習会「らい予防法とはなにか？」を全3回開催した。講師は石崎学（亜細亜大学・憲法学）、竹内英一郎（弁護士・国賠訴訟弁護団）、神美知宏（全療協事務局長）。



第1回学習会 正面 石崎講師

差別を助長した  
憲法違反の法律

## ハンセン病資料館10周年記念事業

### 記念講演とひとり芝居「をぐり考」を上演

●第40号 2003年7月1日…開館10周年記念として、大谷藤郎館長の記念講演「近代の論理とハンセン病」と京楽座・中西和久座長のひとり芝居「をぐり考」を上演。2時間の熱演に200数十人の観客が見入った。



歴史と人権を考える場に

資料館の使命さらに大きく

### 秋季企画展「想いでできた土地」 ガイドツアー6回で320人参加



秋季企画展ガイドツアー

●第82号 2014年1月1日…2014年秋企画展「想いでできた土地 多磨全生園の記憶・くらし・望みをめぐる」では、全生園の園内63ヶ所を選び紹介。会期中、付帯事業として園内のガイドツアーを6回開催。資料館を飛び出し、園内を歩く・見る・聞くことを試みた。

### 賀正



道祖神 撮影 大竹 章

新年号では、入所者・大竹章さんの写真が紙面を飾ることが多かった。

第30号

2001年1月1日(右)

第66号

2010年1月1日(下)



コラム  
3

## 佐川修さんを偲び追悼展と上映会を開催



佐川修（金相権）さんは、本年1月24日に89歳で亡くなられた。佐川さんは、大竹章さんと共に全国のハンセン病療養所を回って協力をとりつけ、資料収集を行うなど、高松宮記念ハンセン病資料館設立に大きな役割を果たした。開館後は、語り部として自らの体験を人前で話し、展示案内を行い、企画展を開催し、資料館だよりを刊行するなど、活動の多くを担った。さらに寄贈資料や送られてくる印刷物を記録し、礼状を出し、入館者数を集計し、日報をつけるなど、庶務も務めた。献身的に当館を支える姿勢は、国立となった後も変わらなかった。近年は神経痛に加え、リウマチ、心臓、肺の疾患とも闘いながら語り部を続けた。一昨年4月に入院した後、

度々車椅子で来館するなど、最後まで当館を気にかけてくれた。また佐川さんは、重監房の飯運びを経験し、らい予防法闘争の座り込みに参加し、全患協運動を本部役員として約10年間支え、在日韓国・朝鮮人ハンセン病患者同盟では在日の入所者の処遇改善に努め、約11年間の会長職を含め30年以上多磨全生園入所者自治会の役員として入所者のために尽くした。『全患協運動史』と『俱会一処』の5人の執筆者の1人でもあった。決して自慢しなかったが、本当は非常に多くの功績を残した方だった。また頼まれると断れない性格で、責任感が強く、そのため多くの人に頼られ、慕われていた。

こうした佐川さんの人柄や功績を知ってもらおうと、4月1日（日）から5月6日（日）まで「佐川修さん追悼展」を開催した。予防法闘争以来の写真、執筆した書籍やニュース、毎日記した手書きの日報などを展示した。亡き佐川さんへメッセージを送るノートも設置した。

4月15日（日）には、「佐川修さん追悼上映会」を開催した。午前は語り部としての講話、午後は全患協前史から最近の課題までを語った二〇一一年のインタビュー映像を上映した。生前親交の深かった方々が多く参加し、佐川さんとの時間を思い起こす機会となった。

## 春季企画展 絶賛開催中！

## 付帯事業も盛りだくさん

現在、春季企画展「この場所を照らすメロディーハンセン病療養所の音楽活動」を開催中です（7月31日まで）。ハンセン病療養所で行われた楽団活動、民謡、カラオケを取り上げ、楽器、楽譜、衣装、写真、映像資料などを展示しています。

企画展をご覧になった来館者から寄せられた感想を、いくつかご紹介します。

・国の間違った制度のためにハンセン病の方々がつらい思いをし

- ・つらい練習に耐え発表するまでの長い道のりに感動しました。ハーモニカの二音一音にこめられた数々の心の叫びが、音と同時に聞こえてくるようです。
- ・身体の不自由があっても、それを乗り越えて表現する楽しみを見出した入所者の方たちの姿に心を打たれました。
- ・音楽の力の大きさを改めて感じました。

今回、療養所の楽団で使われていた10点の楽器を一同に展示していますが、これだけの楽器がそろっていることは、今後難しいかもしれません。この機会に、入所者が音楽に生きがいを見出して情熱を注いだ姿と、その証である数々の資料をぜひご覧ください。

## 春季企画展 付帯事業のお知らせ

## ◎古典・民謡コンサート

入所者らによる琉球古典・民謡と、プロの民謡歌手・三味線奏者との競演をぜひお楽しみください。

【日時】 7月8日（日）

13時30分開演（13時開場）  
15時30分閉演予定

【会場】 当館映像ホール

## 【出演者】

- ・仲里朝篤（三線野村流師範、沖縄愛楽園）
- ・小底京子（琉球箏曲興陽会師範、沖縄愛楽園）
- ・星塚三線同好会（星塚敬愛園）
- ・おもだか秋子（民謡歌手、津軽三味線澤田流 澤田勝女）



コンサートに出演する星塚三線同好会

※予定演目は、当館ホームページ等をご覧ください。  
※入場無料（事前申込不要、先着  
一三〇人まで）

## ◎学芸員による展示解説

【日時】 7月14日（土）・28日（土）  
いずれも午後2時から40分程度

【会場】 当館企画展示室

※入場無料（事前申込不要）



# ハンセン病市民学会 盛会のうちに終わる

沖縄愛楽園交流会館学芸員 辻 央

「みるく世向かていゝ差別に屈しない」を全体テーマに掲げ、7年ぶり2回目となるハンセン病市民学会が5月19日(土)から20日(日)まで沖縄で行われた(2日間の参加者延べ約千名)。「みるく世」とは直訳すれば「弥勒の世界」となるが、戦争や差別のない、平和で平等な豊かな世界を意味する。今大会は、前回大会から継続する課題——療養所の外で暮らす県内の回復者約一千名の生きづらさに加え、沖縄の基地問題を俎上上げたことが大きな特徴となる。紙幅の関係で内容を詳細に紹介できないが、誤解を恐れずに言えば、2つの問題の個性性を十二分に踏まえた上で、沖縄の平和への希求とハンセン病発症者・回復者が人権を求め続けてきた取り組みの交差上になんかを見出そうとした試みであった。端的に要諦を示すことに困難を感じるが、表現するとすれば、生への希求が通奏低音のように響くなかで、ハンセン病問題と基地問題が語られたように思う。



間扱いしなかった」、「基地被害を受け続ける私たちは同じ日本国民ですか。頭でなく、心で受け止めてほしい」と発言された。

2日目は会場を名護市の沖縄愛楽園にうつし、4つの分科会、まよめの全体会等が行われた。分科会は、現在争訟中の家族訴訟、退所者の医療、在園者の自治、体験継承をテーマに議論が交わされたが、体験継承の分科会について少しふれておきたい。

分科会「体験者から非体験者への継承を考える——沖縄戦継承の現場から」は、沖縄戦体験継承の現場に立つ非体験者の実践から、ハンセン病体験継承についての手がかりを得ようとしたものだった。話された内容は多岐にわたるが、体験記録等の体験者と非体験者の共同作業そのものの重要性や、共同作業による非体験者への記憶の分有は、体験者が健在なうちに行われるべき喫緊の課題であること等が確認されたように思う。

沖縄での2回目のハンセン病市民学会は、「みるく世」への処方箋を示すものではなく、森川恭剛さん(開催地実行員会事務局長・琉球大学教員)の言葉を借りれば「差別に屈しない」とは、戦争も差別もない社会への長い道のりを共に歩むための合言葉であり、乗りこえていかねばならない課題について共に考える集会であった。来年のハンセン病市民学会は宮古島等での開催となる。ぜひ、ご参加いただければと思う。

## 第91回 日本ハンセン病 学会開催

6月13日(水)から15日(金)まで、東北新生園において、第91回日本ハンセン病学会総会・学術大会(東北新生園長横田隆会長)が開催されました。

第1日目には理事会が、2日目・3日目は総会・学術大会が行われました。星塚敬愛園の後藤正道園長からはハンセン病が疑われながらも初診時に皮疹を示さない症例の診断と治療について報告されました。

また重監房資料館の北原学芸員、柏木学芸員、栗生楽泉園社会交流館の千川学芸員が発表し、総会では基礎・臨床とともに、学芸員の参加や社会科学系の発表も重視していくことが確認されました。

シンポジウム1では、「諸外国のハンセン病対策と医療から学ぶべき事——国際医療協力と国内医療に求められる知見とは——」をテーマに、「ハンセン病医療の歩み治療薬の変遷から顧みて」、「途上国におけるMDT普及と残された課題」などについて討論が行われました。

シンポジウム2では、「日本ハンセン病学会の現状と課題——新



理事会からの提案——」をテーマに、各ワーキンググループ長からの提起をもとに、①新患調査をどのような組織で継続するのか、②ハンセン病診療協力ネットワークの改定について、③啓発活動における専門医の役割、の各議題をめぐって活発な質疑・討論が行われました。今回は特に③について、啓発活動における医学的検証とひな形の作成について報告・提案がなされました。

議論の結果、①については、委員会を設置すること。②および③については、委員の間で意見の相違があり、今後ワーキンググループまたは専門委員会できさらに討議を深め、理事会の承認を得て公表するとの方針が示されました。

学術集会終了後、東北新生園としんせい資料館の見学会が行われ全日程が終了しました。



## 「追悼の日」式典と 対策協議会開催される

6月22日(金)。今年も「らい予防法」による被害者の名誉回復及び追悼の日」を迎えた。式典会場は例年通り、厚生労働省である。

まず正面玄関前の「追悼の碑」

に、厚生労働大臣、衆参両院議長、全原協会長、全療協会長ら、代表者が献花を行った。その後講堂で、ハンセン病療養所における物故者二七、〇七四人の御霊に全員で黙祷を捧げた。この一年間で一五三人が亡くなられたことになる。

続いて加藤勝信厚生労働大臣が式辞、安倍晋三総理大臣(西村康稔内閣官房副長官代読)、大島理森衆議院議長、伊達忠一参議院議長、上川陽子法務大臣が主催者としてあいさつし、謝罪と反省の弁とともに、回復者が安心して生活できるための施策やハンセン病問題の普及啓発への決意が語られた。なかでも加藤厚労大臣と安倍総理は、名誉回復や偏見・差別の根絶に向けた政府の取り組みについて、ハンセン病やハンセン病対策の歴史に関する正しい知識の普及啓発が重要であり、国立ハンセン病資料館と重監房資料館を拠点に行っていると述べた。

来賓からは金子恭之ハンセン病対策議員懇談会長、志村康全原協会長(堅山勲事務局長代読)、森和男全療協会長、遺族代表として

屋良朝苗氏があいさつをした。森全療協会長は、隔離政策を後世に伝える人権学習の場として、国の責任においてハンセン病療養所を永久保存するよう訴えた。

午後2時から霞ヶ関ビル内にある東海大学校友会館阿蘇の間で、約一〇〇人が傍聴するなか平成30年度ハンセン病問題対策協議会が開催された。

統一交渉団が今年度提出した「統一要求書」には、議題として「(6)国立ハンセン病資料館の運営について」が取り上げられた。このなかで「国立ハンセン病資料館の運営は、現在、日本財団に委託されているところ、同財団は、今般、資料館運営委員会に事前に諮ることなく、独断で、大幅かつ重大な機構改革を行い、これにと

もない多数の人事異動を行った。資料館の運営は、「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」の趣旨に則り、かつ当事者の意向を最重要のものとして尊重しなければならぬ。平成29年度確認事項においては、資料館の年度計画策定における厚生労働省の指針を作成するに關し、この点を確認したところである。しかし、前述のような機構改革が独断で行われたこと及びその内容を見る限り、今後、法の趣旨にしたがった啓発活動と

資料館の運営が、適切に行われ得るのかにつき疑問を持たざるを得ない。国は委託者として、こうした点について十分調査し、受託者である日本財団に対して適切な指導をされたい。」と指摘されたことは重大である。

この点をめぐって川野宇宏難病対策課長が、今回の「機構改革」と「人事異動」について難病対策課も承知していたと回答した。これに対し徳田靖之弁護士はそれならなおさら問題で、これまで築いてきた厚生労働省と統一交渉団の信頼関係を壊すものだに感じた。

今後、統一交渉団の求めに応じた「調査」や「指導」が厚生労働省によつて行われることになる。資料館の現場は、「基本法」の趣旨に則つて館の設置の足場を確認し、粛々と毎日の仕事をこなし、信頼の回復を図らねばならない。



平成30年度対策協議会

## 夏休みのイベントのお知らせ

ご参加  
お待ちしております

### 2018年 「ハンセン病と人権」 夏期セミナー

ハンセン病について広く知っていただくため、本年度も「ハンセン病と人権」夏期セミナーを以下の要領で開催します。

日時：7月27日(金)

10時から16時15分まで

内容：ガイダンス映像の視聴、多磨全生園自治会長・平沢保治さんによる講話、学芸員らによるハンセン病の医学・歴史等に関する講義、館内見学(予定)

参加費：無料

申込み先着50名以内、どなたでもご参加いただけます。受講者には修了証書を授与いたします。

申込み方法：当館ホームページからお申込みいただくか、申込書をダウンロードの上、FAXでお送り下さい(FAX042-396-1298)。

### 夏休み自由研究応援企画

「多磨全生園のフォトブックを作ろう」と

「回復者にインタビュー！記者になってみよう」

資料館では、今年も子ども向けに夏休み自由研究応援企画を開催いたします。

7月29日(日)には「多磨全生園のフォトブックを作ろう」を開催予定。昔の全生園内の様子が印刷された冊子に、現在の同じ場所を自分で撮影し、説明文や絵を付けてフォトブックを完成させるという企画。定員8名。

また8月18日(土)には「回復者にインタビュー！記者になってみよう」を開催予定。回復者をお招きし、参加者が記者のように質問しながらお話を聞く企画。定員10名。

いずれも詳細についてはHPで逐次お知らせしていきます。



カメラを持って園内を歩いてみよう(昨年の夏休み自由研究応援企画の様子)